

## アメリカを行く

池田蔵相秘書官時代に総選挙出馬のための米國視察記。昭和二十六年九月八日から十月二十六日まで、「四國新聞」に17回連載の中の八篇

### 素晴らしい郊外の住宅

サンフランシスコは北アメリカ西海岸の貿易港で、シヤトルやロスアンゼルスと共に日本人には馴染みの深い地名です。この街は太平洋に突出した岬の丘陵に横たわっている。人口は誰に聞いてもはつきりしませんが、八十万というところだろう。ただ最近目立って膨脹しつつあることは、郊外の新市場が急速に拡張されて新住宅がどしどし建てられている状況からみて見当がつく。

朝鮮事変以来、アメリカの軍備は急に拡充されているがその軍事予算の相当部分がカリフォルニア選出の国会議員の努力でこの地方に投入されているとのことで各工場は非常な活況にあるようだ。そのため住宅不足は相当なもので日本の庶民住宅式の粗末な木造住宅が郊外の至るところに

建てられている。もとより中には大きい鉄筋コンクリート建のアパートも数戸建てられてもう入れる許りになっているが、大部分は木造の五、六戸収容できるアパート式住宅や小さい二軒長屋式の規格住宅である。

かような住宅建築と並行して中流の文化住宅の建設も盛んなもので、それは最近の一般的傾向として裕福な人々は市内に住宅をもたないで続々郊外に移っている。日本流に計ってみると三、四十坪の文化住宅が広い道路の両側に櫛比して建てられている。試みにその建築費を尋ねてみると二万ドルから三万ドルというから邦貨に換算すると七、八百万円から千万円見当のもので固よりわれわれには手の届かない代物である。また貸家も建てられていて十五坪内外のアパートで百ドルから百五十ドルの家賃だそうだ。普通サラリーマンの月給は特殊技能のあるもので三百ドル然らざるもので二百ドルが標準だそうだから百ドルという家賃は決して軽い負担ではないと思われる。

街は起伏こそあるが清潔で明るい美しい街、二十階から二十六、七階の高層建築も数戸建てはいるが普通のデパートとか商社は大抵三、四階から十階位の建築に収まっている。高層建築は大抵ホテルで、街を歩いてみて驚くことには人が非常に少いことだ。銀座あたりはもとよりだが高

松の片原町を歩いてみて顔、顔、顔の連続であるがここではラッシュ・アワー以外は歩いている人が珍しい位である。かつてアメリカから日本に来たある要人に「日本に来て一番驚いたことは何ですか」と尋ねたら言下に「人が多いことです、人の圧力です」といわれたことがあるが、なるほどとうなずける。ただクリップという海岸近くの盛り場や公園などを歩いてみるとこれは日本に劣らない人の集合である。それは農村の景気がよいので農村からの見物客が多いのだと土地の人はいつていた。

デパートなどを歩いてみて気のつくことは、室内が明るく清潔であること、柱が空色であれば天井は肉色という具合に濃い色彩に彩られている。品物の値段は決して安くはなく、むしろ日本より高いと思われる。ただ日本は包紙が立派だが向うは粗末なものである。店員に中老婆が多いのに驚いたがこれはどういわけか、研究してみたいと考えている。

サンフランシスコに世界に誇る二つの大きい橋がある。その一つは有名な金門橋（延長七マイル）であり、他はベイ・ブリッジ（延長八マイル）だ。何れも一九三三年に着工して前者は一九三六年に後者は一九三七年に竣工した。工費は前者が三千五百万ドルであり後者は七千七百万ド

ル、使用鋼材は両者で三十万トン、セメントは百五十万トンといわれている。幅員は何れも二十メートル位で二階になっていて上は乗用車が下の道は電車とトラックがそれぞれ走っている。サンフランシスコの気候は七月と八月が比較的寒く霧が多いところ、街を歩いている婦人連中はオーバーを着ている位で今度講和会議がここで開かれることになった一つの理由はここの夏が涼しいからだそうだ。

在留邦人の数は約六千人で戦争中収容されている間に日本人街には大勢の黒人がはいつてきて店舗や住宅を占領されたそうだが現在ではポツポツ復帰している。私達は福田さんのお家で数人と食事を共にしたが話はむしろ内地のこと許りで郷愁というものは強くかつ根深いものだとしみじみ感じた。（九月八日）

### 根強い基督教信仰

長い単調な大陸横断を終えてワシントンについたのは八月十九日の朝でした。まずホテルを決めて首都滞在中の色々の計画を練りました。その日はあいにく日曜なので飲食店以外の大抵の商店は休業でした。ホテルはもちろん中流以下のもので食事めきで宿泊料が四ドル五十セント（約千六

百円)です。もちろんバス付で冷房にしております。ここでも田舎から家族連れで見物に来たお客で賑わっていて私の部屋がとれたのは漸く夕方になってからでした。行く当てもないので一日ホテルのロビーでごろごろしていました。驚いたことにはたまたま田舎から出て来た見物客も日曜日の午前には一室に会して牧師を呼び日曜の礼拝を忘れていないことでした。

ロビーにいる私のところへ一人の敬けんな老婆が来て「これから一同は日曜の礼拝をするから静かにして下さい」といつて来たので漸くアメリカの基督教の伝承の根強いのに感心したほどでした。当日私を訪ねてくれた大蔵省の渡辺財務官もまず日曜日に何処かの教会に行ってみないと本当のアメリカ人の生活はわからないよいつていました。月曜日は陸軍省で占領地から来る人々を世話しているワン博士に会って色々の話を聞きました。博士の祖父はドイツからイリノイ州に移住して来たもので、現在でもイリノイの田舎には兄がいて百姓をしているのだそつです。ドイツ人といえはアメリカ人の血液のなかにはその血が相当流れているわけです。現在のアメリカの人口は一億五千万四百万ですが、そのなかの五十%がイギリス人の系統で、十五%がドイツ系です。黒人が九%、東洋人が一%、残り

の二十五%はロシアやスカンジナビヤからイタリアに至る西欧系のものです。この人種のカクテルのような状態が今日及び明日のアメリカにとってどういふ問題をはらんでいるかは後でもつと詳しく書きたいと思ひます。

ワン博士のところに五人のドイツ人が、私と同様にアメリカの勉強に来ていました。大体四十歳前後の人で、何でも農林省の役人だといつていましたが、まず感心したのは服装がお粗末なことでした。服や靴は何れも相当疲れたもので、泊っている宿は二ドル五十セントだといつていました。ギシギシしたドイツ語式の英語をしゃべつていました。少しも卑屈なところがなく堂々としていました。文字通りの荒廃から再び起上ろうとするドイツ人の気迫にぶつかったような気がして肅然とした次第です。午後はワシントン大学にグレイ教授を訪ねました。

この人はアメリカ史の担当教授で小柄なやや神經質のような人でした。「アメリカは伝統が浅いので歴史という程の歴史もありません」と謙虚に語り始めましたが、「このアメリカの大陸は全部が移民の開拓した大陸ですが、まずこの大陸を発見し、開拓しそこに高度の古代文明を築き上げたのは他ならぬ東洋人です。それはこれから一万五千年位昔からコロンブスのアメリカ発見の年即ち西暦一四九二年

までのことです。今日とどこどこに残住しているいわゆるアメリカン・インディアンというのは実はモンゴル系の東洋人で、シベリアからアラスカを経てこの大陸に入りこんできたものです。ただ一つの集団と他の集団との間に闘争が続き協同精神が欠けていたことと、面白いことには酒の製法を知らないので労働や気候に対する抵抗力が弱かったため、十五世紀末から入り込んできた西欧の移民との闘争に負けたのです。そして今日まで南支の福建あたりからきた中国人や日本の移民などと併せて全人口の百分の一即ち百五十万人が東洋系になっているに過ぎません」となかなか雄弁に語り始めました。

「そしてこの移民ということと、もう一つは開拓者精神というものが、アメリカの歴史を理解する上において見逃してはならない要素です。十六世紀にアメリカに移住してきた西欧人の一割はインディアンに殺されています。なかには一集団移民の九割までが殺された例があります。そういう苦闘をなめつつ西へ西へと開拓して行った不屈の精神を他にしてアメリカの今日の発展を論ずることはできません。アメリカ人は物質的だといわれますが、西欧の旧社会からこの原野に渡ってくるのはよくよくのことで、なるほど宗教的自由や政治的自由を得たい願望もあつたが、何と

いつても自分達の生活をよりよくしようという物質的理由が一番大きかったわけです。よりよい将来という願望をもつてそれが一つ一つ成功してきたのですから、今日のアメリカ人のもっている楽天的な考えもそういう背景からみていただくときよく分ります」とやや紅潮して教授は立ち上りました。(九月十六日)

### 新聞は毎日四十頁

アメリカにきてわれわれ日本人が身近なところで驚くことがいろいろあるが、なかでも自動車馬鹿に多いこと、新聞の頁数が毎日四十頁にもなっていること、石けんはやらに使用してもよいとしてホテルの部屋に毎日五、六個ずつおいてくれるのに洗濯代がどうしたものか高いこと、御婦人が何によらず大事にされていることなどが特に目に立ちます。もちろん、アメリカの自動車というのは日本における自転車と同様に各家庭は大抵持っているとか、御婦人が尊重されること位は進駐軍兵士の日常の所作からわれわれに珍しいことではないはずですが、事実、街を歩いて牛馬車に全然会わないことはともかくとしても、未だに自転

車に会ったことがないので、自動車の普及度は大体見当がつくし、エレベーターに乗っているとき御婦人が乗り込まれると帽子をとることが礼儀になっているとはこちらにきてはじめて知ったわけです。

ワシントン大学のグレイ教授にこの婦人尊重思想はどうして発達したのかと聞けば、「それは機械尊重と同様、アメリカ開拓における労働力の絶対的不足が生んだ産物です。欧州の旧世界から移住してきた移民がまず痛感したのは彼等が立向う自然の大きさに比べて彼等のもつ労働力の不足でした。また最初移住してくる時は働き盛りの男子が多く、女子が少いということも手伝って婦人がこの新世界では珍重されてきたわけです」といふ。「しかし聞くところによるともうアメリカの国勢調査では男女はほぼ同数になったというから、この婦人尊重の慣習というものもだんだん廃れてゆくことになりはしないか」と質問したら教授は「然りとも否とも答えられる。大勢としては一応そのようなことがいわれるが、長い間に醸成されて社会的実践の隅々にまで浸透したこの伝習は、そう簡単には廃れますまい」と答えた。

新聞といえは当地の新聞という新聞はほとんど四十頁です。ニューヨークの「タイムス」にしても、ワシントンの

「モーニング・ポスト」にしても、シカゴの「トリビューン」にしても、みなそうです。もちろん広告に割愛した紙面が半分近くあるにしてもなかなか豊富な内容です。われわれの教養なり思考力は学校で養ったといつのはごく一部分で、大部分は毎日のわれわれの実践から汲みとったものですから、毎日見る新聞の内容如何はその国の文化水準に大きく影響するものと思われまふ。日本も早くもこのように八頁から十六頁の新聞をとりもどしたいものだと思います。そこで八月二十三日に当地の「モーニング・ポスト」社にかつてニッポンタイムス社にあられたアルフレド・フレンドリー氏を訪ねアメリカの新聞事情を叩いてみました。

彼は洗濯してアイロンをかけていないような服を無造作に着ている身なりにかまわない人です。「アメリカでは五千万部の新聞が出ています。対人口比率では世界最高でしょう。アメリカの新聞の特長とするところはまず第一にどの新聞も政府や特定の政党と何等の関係をもっていない完全独立で、自由な新聞であることです（ただ一つの例外はニューヨークにある「デイリー・ワーカー」という共産党の新聞です）。またその内容からいえばニュースと論説を厳密に分けてあることだといえましよう。それに建國当初か

ら新聞の自由ということが、われわれ国民によつて立国の精神の大きい支柱として守護されて来ていますので、取材活動といい、その発表といい、何れの面においても最高度の自由をうけているといえましょう。そしてその威力は相当根強いものです。ところが最近ラジオ、テレビジョンが高度の発達を遂げて社会的影響力の面では新聞を凌ぐ場合があります。例えば故ルーズベルト大統領の三回目的立候補の時、各新聞は挙げて反対の論説を掲げたわけですが家庭に浸透して親まれてるラジオを通じての彼の巧妙な宣伝の前には全新聞が大敗を喫した経験がありますよ」といっていました。

石けんが安いのに洗濯代が高いというのはたしかに一つの矛盾のように思われるが、よく吟味すると前者は大量生産でコストは安い、後者は労働力が高いからだという説も出来ましょう。時計を修繕に出そうとして修繕代を聞けば二十ドルだということで、それでは二十ドルで新品を買った方が得だということでこれを買って来たが大蔵省の財務官は笑っていました。「してみるとこの国では洗濯や修繕はよくよくの場合に限って、新品をつぎからつぎへと買つて使うのが賢明なやり方だね」と聞きたたせば副財務官の杉山君は「アメリカというところはどうして早く古い物を

捨てるかを考えなければならぬ国だよ、その証拠に夏服はもうオフ・シーズンで半値で叩き売っているだろう」といっていた。(九月十八日)

### あくまで親切な役人

九月に入ってからワシントンの日中は九十度を超える暑さで閉口していますが室内はエヤコンディションといつてしよつちゅう空気を入れ替えているので涼しくなっています。どの役所やオフィスに行っても一室にせいぜい二、三人の人がゆつくりと整然と執務している状況は羨しいと思います。更に羨しいと思うのはみんな大変親切なことで、例えばアメリカの陸海空三軍と国防省がはいっているペンタゴンビルディングのように三万人も人がいるところでは部屋を捜し当てるのが一苦労ですが、道を聞けば態々ついて来て教えてくれるし、紹介の労を頼んでも面倒がらずにやってくれて時間と場所をハッキリときめて、行く道筋や部屋の番号、電話の番号まで教えてくれます。それは彼等が特に努めてやっているというよりは一般の空気がそのように出来上つていて極めて当り前のことを自然にやっているに過ぎないように見えます。昨日も私が農林省に行つ

ていると在外事務所から電話があつて大蔵大臣からの伝言で一時半と二時の間にサンフランシスコのホプキンスホテルに電話せよとのことでしたので、まごまごしていると傍らにいたオテイガーというスペイン系のアメリカ人で農林省の役人ですが、彼が態々電話番号を捜してそのホテルを呼び出して大臣が電話口に出られるまで自分で世話をやいてくれました。「各国から大勢の人がきて一々こんなことまで世話をされることは大変でしょうね」というと彼は平気な顔で「いやしょっちゅうやっていることです。私の役所に限らずどの役所でも国際的な仕事が多いのです。穀物や綿花の品種の改良でもここで発見したものは各国に送つてあげています。どの国も世界の農業の進歩ということを中心にしてやっています。この間もお国の専売公社の大熊君が来てこのビースをいただきましたがどうも香りが不足しているようでヴァジニアの葉やトルコの葉をもつと混ぜなければいけないと思ひました。そういう世界的な原料の割当というような仕事はワシントンに国際的な機関があつて四、五十人の人が働いています。いわば世界政府が部分的にでき上つているようなものです」といふ。「してみるとさしずめワシントンは世界の首都のようなものですね」と念を押せば彼は笑いながら「そうです」といふ。そこへ

色の黒い大きい男が入つてきて何か判らない言葉でオテイガー君と話をしているかと思つとやがてその男を私に紹介して「この方は南米のペルーの人で農林省の技師です。私はスペインが郷里ですのでどうしてもスペイン語の方が懐しいのでつい失礼しました」といいつつその男を何でも官房の人事課長に電話で紹介してやつていたようです。そこへ、ノンネクイの六尺豊かな色の白い青年がやつてきて家畜のことでしきりに話し合つていましたが、英語がやや不自由なように見えるので「何処からきましたか」と尋ねますと「この人はフランスの畜産局の人です。家畜の勉強にきているのです」といふ。そして家畜の飼育にはこういう本をお勧めしますがあいにく手元にありません。本屋に行つて買つて下さい、といいつつ地図をひろげて道筋を教へて「三時半にもう一度ここにきて下さい」といつてかえしていました。すべてがよどみなく淡々としています。アメリカ人はこの第二次世界戦争を経験してから急速に成長し国際的な訓練ができて大きく伸びたなあと痛感しました。そして世界の指導的な国家であり国民であるという自覚が自然に身につけてきているのだと思ひました。

こういう親切な行いというものはいろいろ考えてみると結局正直なところから芽生えるものだと思います。人

のいうことの裏を考えてみたり人を疑うということになるとなかなかその相手の人に親切になれるものではありません。私がこうして毎日何人かの人に会っていろいろのことを聞いたり資料をもらったりしていますが、何れの人もこちらの質問を一生懸命に聞いてそのテーマを回ってできるだけ具体的に説明してくれ、具体的な資料を捜してくれます。こちらでもうこの辺で切上げようと思つて話題を転換しようとする、「ちよつと待つて下さい、貴方の理解を助けるためにいい資料があります」といつて自分の書棚のファイルをもってきたり場合によつては付設の図書館や統計課に連れていつて資料をみせてくれたりします。つまりその問題が案外つまらない問題であつても相手のいうことを額面通りとり上げて真正面から取組む真摯さを持ち合せているようです。これらはすべて「衣食足つて礼節を知る」類いでどの国民だつてアメリカのような豊かな余裕のある國に育てばみんなそうなるかと一応は考えられます。私などもアメリカ人の生活は非常に豊富で裕福なものと考えこんでいた一人です。しかしこちらで注意深く観察してみますと、なかなかさうではありません。早い話が洋服や靴をみましても、なるほど東京でみるものよりは、いいと思います。古い靴はともかくとしても昔の兵隊靴のよう

な裏がすりへつてゐるものも平気ではいてゐるし、洋服も特にいい物だなあとは思えないで下町にあるレデーメイドの三十ドル前後のものを着てゐるのが多いようです。特に食生活の面ではわれわれが大いにもつて範としなければならぬところがあります。先月の二十九日の夜と三十一日の夜はそれぞれ連邦教育局の課長に自宅でご馳走になりましたが、何れも一品料理とコーヒーとお菓子であとは冷い水をのんで渴を医しつつ心ゆくまで話を楽しんだりレコードに興じたりするやり方です。日本のように数品の料理と酒を振舞つて泥酔に至るといふのはちよいと趣がちがいます。尤も最初の晩は訪問早々白い葡萄酒を出されましたが、三十一日の夜は到頭ドライでした。つまり虚飾をはつたり無理をしないで自然に人生を楽しむというやり方の方です。国力が内外に伸張しようとする國の国民生活は決して安易なものではないという鉄則に対してこのアメリカも決して例外ではないように思われます。無論アメリカの役人の給料はわれわれとは比較にならぬ程高いようです。最低の事務員タイピスト級が年収二千五百ドルといひますから日本では月収七万円をこえる勤定になります。尤もかかる待遇に対して民間（民間でもいろいろあつてはつきりつかみかねますが最低月収百二、三十ドルの所も相当ある



よつです）では出し過ぎるといふ非難があるよつですが、ともかく相当なものです。私のご馳走になつた連邦教育局の課長級で年収七千ドルないし八千ドルといひます。併し彼が住まつているアパートの家賃は三部屋で月百五十ドル（五万四千円）といひますから月収の二割五分程度は家賃に食われるし税金も州の両方からとられる始末で決して楽ではないといひていました。ちよつとバスや電車によつても十セントないし十五セントとられますから日本の三十六円ないし五十四円という勘定になるし、散髪洗髪、ヒゲ剃を含まないで最低一ドル（三百六十円）、靴磨きが十五セント（五十四円）という始末ですので日本のように食費が六、七割も占めるべらぼうな状態とは違ひますものの、非常に余裕があるものではないよつです。それに今度は膨大な国防費支弁のため百六十億ドル（五兆七千六百億円）の増税を敢行するよつですからアメリカ市民の生活も逐次弾力を失つてくるかと予想されています。話はこつして増税問題にまでまいりましたが次の通信では先週三日間予算局で調べたアメリカの戦時財政の概貌をまとめて県民各位に贈りたいと思ひます。（二十六日）

### なお遠い平和到来

九月八日講和条約は日本を含めた四十九カ国によつて調印、式場には日章旗が掲揚された。この瞬間、アメリカ人は条約をめぐりいかなる表情を示しているか。九月九日のニューヨーク・タイムズを手掛りにその表情を探つてみよう。その日の紙面は吉田首相とその後ろに立ち並ぶ日本側全権の写真を一面に大きくのせ、「対日講和条約調印さる」の大見出しを掲げている。そしてその第一付録「週間ニュース」の一、二面は専ら条約調印に関する記事と社説で埋められている。私は読者とともにその記事を追つて行きたいと思ふ。

主権の回復 サンフランシスコの会場には第二次世界大戦に日本と戦つた五十一カ国の国旗と並んで昨日、日章旗が掲揚された。これは平和条約の調印を象徴したもので、真珠湾攻撃の恥ずべき日から数えてまさに九九年と二百七十四日目に当る。調印式に先立つ五日間は専ら外交戦が展開された。それを通していよいよ明白になつたことは、条約を結んでも日本ならびに調印各国に眞の平和が訪れるのはなお遠いといふことだ。調印は冷戦の新局面の序曲で

ある。とくにアジアにおける闘争の序曲である。昨日の調印はわれわれの立場を有利にはしたが一方ソ連には数個の宣伝材料を提供したことになる。

朝鮮事変の暗影 サンフランシスコに集まった各国代表は条約の討議にそつて注意深く朝鮮の情報を検討していた。彼らの関心はソ連代表アンドレ・グロムイコ氏が八日「この条約は極東における新しい戦争の種をまくものだ」と退場してから一そう深刻になつてゐる。この声明が朝鮮における戦闘を再開し、極東と世界に大きい危険をもたらすことを予告するものであるかどうかは、こんこの動きが証明するだらう。

条約の決算表 調印をあっせんした米、英二国代表はソ連のつぎの動きを気にはしているものの、会議全体を回顧してホツとした気持でゐるようだ。開会当初には彼らはこんなに円滑に会議が進ぶものとは期待していなかつた。開会早々会議はつぎの二つの可能性によつて成行きが憂慮された。その一つはいつまでもなく三十人に余る専門家を従え三十を超える問題案件の書類を携えてサンフランシスコにのりこんだグロムイコ氏が頑強に条約に反対してきたので会議を延ばされはしまいかと懸念されたことと、その二は二、三の非共産主義国（アラブとアジアの六国はすこ

ぶる怪しい立場にある）が調印をしぶつては対ソ戦線の分裂を招きはしないかと心配されたことである。しかしこの二つのことはいずれも起らなかつた。

鋭い批判 非共産主義国は強い批判を投げかけた。ニユージーランドとオーストラリアは将来の日本の侵略を警戒し、日本の再軍備制限規定が条約にないことを遺憾であるとした。日本の侵略の犠牲となつたフィリピン、インドネシアその他の国は賠償規定に失望した。他の諸国は日本の経済的競争の再起を懸念していた。吉田首相が金曜日の会議で「今日の日本は最早昨日の日本ではありません。平和と民主主義と自由を捧持せる新しい国民として各位の期待に背かない積りです」と所信を披瀝した時には拍手と喝采が湧いた。しかし二、三の代表は沈痛な懷疑とにがにがしさを表明した。フィリピンのロムコ外相は吉田首相の方を向いて「日本が侵略封建的かつ軍事警察的国家から事実上そうした徹底せる民主主義に永久に変貌することを信ずることは人類に過度の軽信を強いるものだ」と叫んだのである。対日講和は極東の将来に大きい諸問題を残している。戦略的見通し 戦略的にはこの条約でアメリカの対ソ闘争は重要な前進を示したといえよう。ソ連は日本を武装解除のままおいておきたかつた。またアメリカが日本の基

地を利用してウラジオストックヤソ連の海域に接近することを防ぎたかつた。スターリンは彼に先行したロシア皇帝と同様に高度に産業化した経済と太平洋に面した暖い港に恵まれた日本をロシアの支配下にもつてくることを夢みていた。アメリカはロシアのこの夢の実現を阻止しようとしている。また極東における戦略地盤を安定せしめ、第二次世界大戦のもたらした日本帝国の崩壊による真空状態を充填しようとしている。さらにアメリカは日本を共産主義の浸透に対する太平洋の外壁たらしめようとしている。再武装した日本は、アリューシャンから南方に走る島々の国防線における大きいギャップを埋めるであろう。新日本陸軍の基礎は七万人を数える警察予備隊によって既に与えられている。しかし結局日本の国防の責任はアメリカから日本人自身の肩に移されるであろう。かかる戦略的動きは太平洋を狙う共産主義に対する空母と人力による防衛線を提供するのである。しかしアジア大陸における勢力均衡は依然としてロシアと中共に有利だ。

日本の将来　日本は東洋におけるもつとも有力な工業国としてすでに相当の立直りをみせている。日本の商船は大洋に出現し、国内航空も始まった。しかしカリフォルニア州よりやや小さい国土に八千四百万人を養わねばならな

い日本の経済はたしかに困難だ。従つてこれまでのようにこれからも長くアメリカの援助を必要とするであろう。そして本当の健全な経済を再建するには海外貿易に依存するところが大きいであろう。占領中多くの政治的改革があつたが、それは民主主義のほんの入口にすぎない。再び古い全体主義が台頭しないとは誰も保証できない。間もなく日本は中共と国民政府いずれを選ぶかを決めるといふジレンマに直面するだろう。しかし日本が中共と条約を締結することは日本が中共に産業設備を供給する役割をもつことになるので、それはアメリカの欲するところではなく、アメリカから大きい圧力をつけることになる。

以上がニューヨーク・タイムズの条約に関する総括的記事の要旨である。(十月八日)